

9月29日(火)～10月3日(土)
アテネ・フランセ文化センター(御茶ノ水)

Mostra de Cinema Português Contemporâneo 2026

マノエル・ド・オリヴェイラ、パウロ・ローシャ、ペドロ・コスタなど

優れた映画作家を輩出してきたポルトガル映画。

その最近作の中から、

ベルリン国際映画祭2016短編部門金熊賞を

史上最年少(当時24歳)で受賞した女性監督レオノール・テレスや、

同映画祭2023長編部門銀熊賞受賞者でありながら

本年1月に惜しまれながら世を去ったジョアン・カニージョなど、

世界が注目する映画作家を特集上映。

現代ポルトガル映画 傑作選 2026

上から『とある蛙のバラード』『水際』『Fuck the Polis』
『母なる水』『軋む日々』



とある蛙のバラード | **Balada de um Batráquio**

2016 | 監督:レオノール・テレス | ベルリン国際映画祭短編部門金熊賞

水際 | **Terra Franca**

2018 | 監督:レオノール・テレス | シネマ・デュ・レエル映画祭SCAM賞

Fuck the Polis

2025 | 監督:リタ・アゼヴェード・ゴメス | マルセイユ国際映画祭グランプリ

母なる水 | **Água Mãe**

2025 | 監督:鈴木仁篤、ロサーナ・トレス |

リスボン国際ドキュメンタリー映画祭・国内映画部門最優秀賞

軋む日々 | **Mal Viver**

2023 | 監督:ジョアン・カニージョ | ベルリン国際映画祭銀熊賞

*いずれも日本語字幕

レオノール・テレス監督

(『水際』監督、『軋む日々』撮影監督)

来日決定!



9月29日(火)

16:20- Fuck the Polis [74分]
18:00- とある蛙のバラード [11分] + 水際 [82分]
19:40- トーク レオノール・テレス監督 [60分]

9月30日(水)

16:50- 母なる水 [72分]
18:30- 軋む日々 [127分]

10月1日(木)

16:50- とある蛙のバラード [11分] + 水際 [82分]
19:00- 母なる水 [72分]

10月2日(金)

16:20- 軋む日々 [127分]
19:00- Fuck the Polis [74分]
+ 記録映像「リタ・アゼヴェード・ゴメス監督自作を語る(司会:山下宏洋[イメージフォーラム])」[34分]
提供: 駐日欧州連合代表部 協力: イメージフォーラム

10月3日(土)

13:40- とある蛙のバラード [11分] + 水際 [82分]
15:40- 軋む日々 [127分]
18:00- トーク「名監督 ジョアン・カンニージョを追悼する」(日本語-ポルトガル語逐次通訳) [90分]
レオノール・テレス(『水際』監督、『軋む日々』撮影監督) + 北川喜雄(撮影監督『悪は存在しない』『LOST LAND』)



上段・左から『とある蛙のバラード』『水際』『母なる水』
下段・左から『Fuck the Polis』『軋む日々』

入場料

【1回券】一般1,500円 | シニア・学生・障がい者1,200円 | 会員1,000円

【3回券】3,000円

* 先着順、各プログラム入替制

* チケットは1回目の上映30分前から当日上映分を販売します。

* トークは本特集のチケット半券提示で入場自由。

会場 & お問い合わせ

アテネ・フランセ文化センター

東京都千代田区神田駿河台2-11 アテネ・フランセ4階 | JR・地下鉄 御茶ノ水・水道橋駅より 徒歩7分

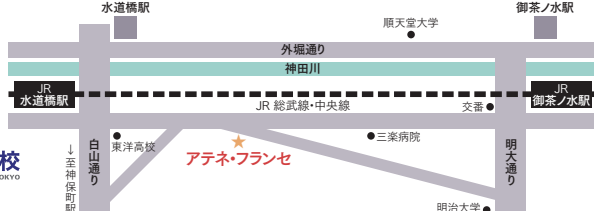
TEL.03-3291-4339 (月曜13:00-17:00 | 火~土曜13:00-20:00 | 日曜休館)

<https://athenee.net/culturalcenter/> | infor@athenee.net

【主催】ポルトガル大使館 / Embassy of Portugal Camões, IP - Portuguese Cultural Centre

【共催】アテネ・フランセ文化センター / Athénée Française Cultural Center

【協力】映画美学校 / The Film School of Tokyo | イメージフォーラム / Image Forum





とある蛙のバラード

Balada de um Batráquio

2016年 | ポルトガル | デジタル | 11分

ベルリン国際映画祭短編部門金熊賞受賞

監督：レオノール・テレス

脚本・編集・撮影：レオノール・テレス

ポルトガルでは「ロマン人立入禁止」のしるしとして、店先に陶器の蛙を置く風習がある。父方の祖母がロマ系であるテレス監督は、この排外的な習慣を問題としてただ提示するだけでは不十分だと感じ、それに対してどのような応答があり得るかを模索するためにこの短いドキュメンタリーを制作したという。寓話的な語りで根深い社会問題をあぶりだした本作により、監督は2016年に第66回ベルリン国際映画祭短編部門で史上最年少の金熊賞受賞者となった。



水際

Terra Franca

2018年 | ポルトガル | デジタル | 82分

シネマ・デュ・レエル映画祭SCAM賞受賞

監督：レオノール・テレス

撮影：レオノール・テレス

編集：ジョアン・プラス、ルイザ・オーメン

テレス監督の長編第1作。監督の故郷であるテージョ川沿いにある町、ヴィラ・フランカ・デ・シーラに暮らす漁師の一家の日常を写し取ったドキュメンタリー。漁業の規制が変わったため、昔ながらの漁法では仕事が続けられない不安を胸に抱える父親のアルベルト、小さなカフェを切り盛りしている現実的な母親のグリア、自分の人生を始めようとしている娘たちの家族の1年に寄り添う。シネマ・デュ・レエル映画祭でSCAM賞のほか、多数の賞を受賞している。

レオノール・テレス | Leonor Teles

1992年、リスボン近郊のヴィラ・フランカ・デ・シーラに生まれ、リスボンで映画制作を学ぶ。大学在学中の課題作として制作した、ロマ系である父方の祖母と曾祖母の人生を追った短編ドキュメンタリー『Rohma Achans』(2013)が注目を集め、このテーマを引き継いだ次作の『とある蛙のバラード』が2016年にベルリン国際映画祭短編部門で金熊賞を受賞。最新作は、リスボンとバンコクを舞台にした『Baan』(2023)。



© Frederico Gomes



Fuck the Polis

2025年 | ポルトガル | デジタル | 74分

マルセイユ国際映画祭グランプリ受賞

監督：リタ・アゼヴェード・ゴメス

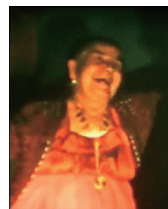
撮影：リタ・アゼヴェード・ゴメス、ビンガム・ブライアント、マリア・ノーヴォ

N.W.A.による既存のプロテスト・ソング“Fuck tha Police”の題名をもじった強烈なタイトルとは対照的に、本作は古代ギリシャのポリスへの深い愛情と敬意に満ちた、静謐で詩的な作品。20年前に不治の病を宣告された後、ギリシャを旅したイルマが再びギリシャを訪れる——。監督自身の個人的体験も投影された本作は、観客を文学的な体験としてエーゲ海の島々へと誘う。2025年FIDマルセイユ国際映画祭国際コンペティション部門グランプリ受賞。

現代ポルトガル映画傑作選2026

Mostra de Cinema

Português Contemporâneo 2026



リタ・アゼヴェード・ゴメス | Rita Azevedo Gomes

1952年リスボン生まれ。現代ポルトガル映画を代表する女性監督。マノエル・ド・オリヴェイラ『フランシスカ』(1981)等の撮影に助手として参加。演劇やオペラの衣装や美術を担当。長編第1作は1990年の『O Som da Terra a Tremar』で、次作は11年後に完成した『Frágil Como o Mundo』(2001)。第3作目の『ある女の復讐』(2012)で国際的に評価された。他にラス・パルマス映画祭で最優秀国際映画賞を受賞した『ポルトガルの女』(2018)やエリック・ロメールの戯曲の映画化『変ホ長調のトリオ』(2022)など。

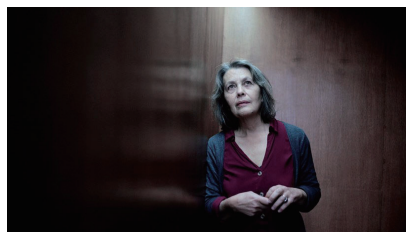


photo by Miguel Baltazar



母なる水

Água Mãe

2025年 | ポルトガル | デジタル | 72分

リスボン国際ドキュメンタリー映画祭・国内映画部門最優秀賞受賞

監督：鈴木仁篤、ロサーナ・トレス

撮影：鈴木仁篤

録音：ロサーナ・トレス、鈴木仁篤

メルトラを流れるグアディアナ川のほとり、かつてパンのための小麦粉を挽いていた水車小屋がある一帯は、鳥が飛び交い人びとがくつろぐ場所。漁船が通り魚が跳ねるこの場所の雰囲気は潮の満ち引きとともに一日の中で刻々と変わり、水の色と風景は一年を通して変化する。トレス監督の母であり、2022年に逝去した言語学者・作家のマヌエラ・パロス・フェレイラが著したテキスト「魂」をトレス監督が朗読する。



軋む日々

Mal Viver

2023年 | ポルトガル、フランス | デジタル | 127分

ベルリン国際映画祭銀熊賞受賞

監督：ジョアン・カニージョ

撮影：レオノール・テレス

出演：アナベラ・モレイラ、リタ・ブランコ、マダレナ・アルメイダ

ポルトガル北部の海辺の町で小ぶりで瀟洒なホテルを営む女主人とその娘、孫をめぐる女三代の物語。どうしても娘を愛せない母、愛されない娘の苦悩とそのトラウマがあぶり出されていく。三人の愛憎劇に並行するように、ホテルで働く人々や宿泊客の人生の軋みも透けて見えてくる。撮影監督は『水際』の監督レオノール・テレスがつとめている。なお、カニージョ監督は今年1月死去。その突然の訃報は世界の映画関係者に衝撃を与えた。



左から『とある蛙のバラード』『水際』『Fuck the Polis』『母なる水』『軋む日々』

鈴木仁篤 | Hiroatsu Suzuki

京都生まれ。独学で映画を学ぶ。数年間の沖縄滞在中、写真を撮り始める。視覚的・芸術的センスを磨くことを目的にヨーロッパを放浪。ポルトガルでロサーナ・トレスと出会い、映画を撮り始める。彼女との初監督作品『丘陵地帯』（2009）はロカルノ、トロント、ウィーン国際映画祭などで上映された。『TERRA』（2018）と『母なる水』（2025）はリスボン国際ドキュメンタリー映画祭・国内映画部門にて最優秀賞を受賞。



ロサーナ・トレス | Rossana Torres

両親の政治亡命中にルーマニアで生まれる。幼少の頃ポルトガル中部に住む祖父母のもとで暮らし、その後リスボンでビジュアルアートと映画を学ぶ。1994年からアレンテージョ地方メルトラに住み、映画制作や教育活動を目的としたアソシエーションENTRE IMAGEMを設立。様々な映画やアニメーションのワークショップを開催している。鈴木仁篤と4本の映画『丘陵地帯』（2009）『レイト・クレームの味』（2012）『TERRA』（2018）『母なる水』（2025）を監督。



ジョアン・カニージョ | João Canijo

1957年ポルトに生まれる。マノエル・ド・オリヴェイラ、ヴィム・ヴェンダース、アラン・タネル、ヴェルナー・シュレーターなどの助監督をつとめた。俳優や脚本家と緊密に協働し、家族、社会、権力、アイデンティティを中心のテーマとして独自の作風を築き、ポルトガル現代映画を代表する監督として注目された。ベルリン国際映画祭で銀熊賞を獲得後、今後の活躍が期待されたが本年1月に心臓発作で急逝。享年68。

